

2011年  
10月18日  
火曜日

田 禾 准教授（人文科学、中国語学）

# 言葉の連想

## 時間と空間の共通

まず、一つの有名な話を紹介する。ある家族の娘が海外に留学に行くこと決めた。歳ごろの娘だったため、お父さんは心配で、そして絶対留学する間に勉強だけに集中し、恋愛をしないと娘に約束させた。しばらくすると、娘からの手紙が来た。中に一枚の写真が同封され、ボートをこいでいる娘の姿が映っていた。微笑んで、幸せそうな顔している娘の写真を見て、「誰がこの写真を撮ったのだろう」と、お父さんはとても心配になった。この話から分かるのは、例えその画像に映っていないくても、人は目で見えるもの以上のことまで連想できるということである。言語もこの連想機能が働いている。例え「You Are My Sunshine」という歌詞聞いたら、愛の深さが理解できるのは連想機能の結果である。つまり「比喩」の手法で、人間

と太陽の輝きを結びつけ、二つの概念のイメージを重ね合わせることである。連想機能に関わる時間と空間の共通の現象もしばしば見られる。例えば、「前」「後」は明らかに空間の概念であるが、「授業する前に」の「前」「放課後」の「後」は時間をさすことになる。「以前」「以後」もある空間における基準点の前後から時間軸における点を基準として完全に時間の言葉になる。「一番上の兄」「一番下の弟」は最初・最後に生まれたとの時間に関わる。空間の範疇から時間への拡大は一般的な認知規則と一致する。つまり、具体的な物から抽象的なものへの認知ルートである。空間は形がある具体的なもので、時間は形がない、抽象的な存在である。これは人間の一般的な認知能力とも言えるので、それぞれの言語には同様の現象が見ら

れる。日本語もそうであるし、英語も *background* も空間と時間の兼用する言葉である。中国語も同様である。例えば「上」はよく「+」の意味を表わす。「彼のこと好きになった」を中国語で言うと、「愛上」を使用する。この現象は日本語と完全に一致することが指摘されている。日本大手前大学学長古典詩の研究者川本先生があげた例には、「上」機嫌、「気分が（舞い上がる）」など、「人の心持という捉えがたいものを把握するために、（上向きは幸せ／下向きは不幸せ）」という空間的方向づけ、目に見える具体的な上下運動のたとえが用いられるのである」と指摘した。（下向きは悪い）の例としては、「気分が（落ち込む）」「評判が（落ちる）」「景気の（低）迷」「（低）俗」などがある。ここまで

は理解しやすい認知現象であれば、一つ理解しがたい現象、時間から空間へのものである。「ここはもうすでに県外です」のように、「すでに」は時間の概念からこの文の置いている空間の概念として使われている。この現象について、神戸大学の定延利之先生は「視野」の概念で解釈した。例えば、「派手な服を着る先生も偶にいるね」の「偶に」は、発話する人が「偶に」見たのこと、「偶に」話者の「視野」に入ってきたということである。つまり、人間は空間に存在する現象を発見するという認知行為が発生する時間から来たものである。

以上述べてことは一つの言語現象であり、分析、説明はまだ推論に過ぎないので、みなさんの力で人間の認知能力、そして言語の魅力について研究を深めてほしい。